

巻頭インタビュー

# 自分の強さを信じ 自分らしく輝く

～里中 満智子さん(マンガ家)～

1964年、高校2年生でマンガ家デビュー。以来、今日まで多くの作品を発表し続けている里中満智子さん。幅広い年代層のファンを持つ里中作品には、強く生きる女性主人公が数多く登場します。

女性の活躍が論じられる昨今、里中さんの中に「強い女性像」が生まれた経緯や、漫画への愛情、感じていらっしゃることをうかがいました。

## 漫画はいろいろな立場の人を理解できるツール

はじめに影響を受けた漫画は、手塚治虫先生の『鉄腕アトム』。雑誌連載のストーリーには案外暗いエピソードが多く、敵側のロボットの葛藤や悩みが丁寧に描写されていたので、いつも泣きながら読んでいました。

ところが、この『鉄腕アトム』が悪書だとして、教育委員会や学校が追放運動を起こしたんです。「字が少なから子どもの脳の発達に良くない」「ロボットが喜怒哀楽を持つなんておかしい」「闘うシーンが残酷で子どもがマネをしたら大変など、子どもから見たらおかしな理屈。「見かけで人を差別しないように」と言うくせに、大人は漫画というだけで中身を見もしないで悪だと言っんです。

そんなの納得できません。「大好きな漫画を私が守らなきゃ」「私が大人になるまで漫画を存続させたい!」そんな思いから、自分でも漫画を描くようになっていきました。

弁護をさせてもらうと、漫画って実は子どもの心の成長にすごく良いんですよ。なぜなら漫画には、すべてのキャラクターのセリフを読み手自身が読むという特徴があります。これは、いろいろな立場の登場人物の

気持ちを理解することにつながります。

## 描き続けてきたのは強い女性の主人公

「マンガ家になりたい」と言うだけで変人扱いされるような時代でしたが、中学生になる前に志は固まっていました。「目を覚ましなさい」「こんな子に育てた覚えは…」と毎日言ってくる母親が鬱陶しくて(笑)、一刻も早く家を出るために片っ端から投稿をはじめました。高校生になってからは印刷工場でアルバイトをしながら、もらった反故紙(※)の裏に漫画を描き続け、高校2年生になる春休みに講談社が初めて開催した新人漫画賞で一等をとり、その作品『ピアの肖像』でデビュー。やっと堂々と漫画が描けるようになりました。

漫画って作品さえ面白ければ読んでもらえるという世界。当時は、女流マンガ家として上田としこ先生、わたなべまさこ先生といった方々が活躍されていましたから、男女も学歴もキャリアも関係なく、公平で気持ちが良いだろうなと想像していたら、本当にその通りでした。

ただ、当時の少女漫画に登場する女の子たちはすぐに「私は不幸」とシクシク泣くんです。そこには違和感

